

森について学び続け、経験に基づいた知識を蓄え、それを活かす

田中 和博

(たなか かずひろ、京都府立大学大学院生命環境科学研究科)

森林学を、一般の学問のように、体系的に組織化された知識や方法と捉えることには少し違和感がある。もちろん、そうした考え方や手法が含まれていてもよいのであるが、それだけではないという強い思いがある。現実として様々な森林があり、地球の長い歴史の中でそれぞれの森林は変容しながらも世代を超えて受け継がれてきた。人間の寿命をはるかに超える非常に長い年月にわたって存在してきたし、これからも存在し続けて欲しいと願う。そうした森林の存在や営みを、合理的な精神でもって「学」として体系化しようとしていること自体に、人間の傲慢さを感じてしまう。そもそも合理的な精神とは何なのか、それは本当に合理的なのかについて、研究者は謙虚に自問する必要があるだろう。2011年の原発事故の時に「想定外」という言葉が多用されたが、頭の中だけで考えることの危険性を思い知らされた気がする。しかも、過去の津波などの災害記録がほとんど活かされていないかたというのではないか……。

自分では制御できないものは環境と呼ばれる。そして、自然環境の代表とも言うべき存在が森林である。したがって、森林を人間が事細かに制御することは到底無理である。環境を扱う分野では経験は大変に重要であるに違いない。しかし、生活者や熟練者の経験知や経験則を軽視してきたのが20世紀以降だったのではないだろうか。森林学では経験に基づく知識が重要であり、それをどのように取り入れていくかが今後の課題である。

最近の科学は、森林学も含めて、個々の専門領域では非常に進歩したが、総合的に全体を捉えることに対しては、むしろ停滞しているように感ずる。部分の研究や部分の最適化ばかりを追い求め、結果として全体像がつかめなくなっているのが現状ではないだろうか。今日の環境問題の多くは、経済問題と表裏一体の関係にある。経済的な価値観や評価結果が、政策にも影響を及ぼしている。森林・林業再生プランにしても、現在は、林業地として採算があう区域に関心が集中しているが、今後、本当に問題になるのは、不採算な人工林をどのように自立した森林に誘導していけるかであろう。その方がコストが多くかかると思われるが、現状では深く議論されていない。市場経済のもとでは私企業は儲からない部門から



タワーに登ってご機嫌の笑顔(2003年9月、金沢大学の角間の森にて)

撤退することはできるが、行政や地域住民にとっては撤退されてしまった跡地をどうするかという問題が残る。このように市場経済の考え方で最適化を図ったり、帳簿の帳尻あわせをしようとすれば、そのしわ寄せは必ず社会的弱者に現れ、全体にも影響する。

地球の環境保全に真剣に取り組むとするなら、その地域に住み続ける人の視点に立つことが重要である。ゲーリー・シュナイダーが提唱するリインハビテーションの考え方である。利益を求めてより有利な土地へ移動していくような資本主義的な行動様式や考え方では、森林を守ることはできない。人間活動の対極にあるものの一つが森林の営みである。人間活動は経済的価値観の影響を受けるが、森の営みは自然の摂理に従う。森林研究に携わるものは、物言わぬ森林の代弁者であり続けて欲しい。経験を積むということは、現実を直視して、それを受け入れることから始まる。中山間地域では、過疎化と高齢化のため、現場で培われた経験が消失しようとしている。そうした経験をGIS(地理情報システム)等の現代の技術によって知的財産としてデジタル化し、後世に伝えていくことも必要なことであると思っている。森林学とは森林について学び続けるとともに、経験に基づく知識を継承し、自然との関係を問い続けるものなのかもしれない。

(専門:森林計画学)